

茨城県におけるネギハモグリバエ別系統の
防除体系の検証

茨城県農業総合センター園芸研究所 佐 藤 信 輔

はじめに

ネギハモグリバエ *Liriomyza chinensis* (KATO) (図-1) は日本各地に分布し、その幼虫が葉肉内を食害しつつ潜孔(マイン)を形成し、ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ等のネギ属作物に被害を与える害虫である(土生, 2019)。2016年10月ごろから、これまでの系統(以下、従来系統)とは様相の異なる被害が京都府内のネギ圃場において確認され、遺伝情報の解析の結果、従来系統とは異なる塩基配列を持つ系統(以下、別系統)として国内で初めて報告された(京都府病害虫防除所, 2019)。その後、農林水産省の発表によると、別系統の発生は複数の県で確認され、2023年4月11日現在、37都府県から報告されている。茨城県においても別系統は2019年5月に初めて発生が確認され(茨城県病害虫防除所, 2019)、県西地域のネギ産地を中心に多発しておりその被害は甚大である。しかし、別系統の各種薬剤の殺虫効

果など、防除体系の構築に必要な不可欠な基礎的知見は乏しい。そこで、今回の報告では別系統に対する有効薬剤を選定するために、現地ネギ圃場から別系統の成虫を採集し、ネギ苗に産卵させ、ネギ苗内にてふ化した幼虫に対する各種薬剤の殺虫効果について調べた。加えて、ネギ圃場において、殺虫効果試験の結果、有望と思われた薬剤を散布し、別系統に対する防除効果について試験を行った。本稿では、これまでの薬剤の殺虫効果試験や圃場における防除試験の結果と併せて防除対策について紹介する。

I ネギハモグリバエ別系統の被害の特徴と
発生状況

TOKUMARU et al. (2021)によると、従来系統の幼虫は葉の表皮直下と内面に交互に侵入することで破線状のマインを形成するのに対し、別系統の幼虫は表皮直下のみを潜孔・食害し連続的なマインを形成する。加えて、別



図-1 交尾中のネギハモグリバエ



図-2 ネギハモグリバエ別系統による被害株

Effective Control Schedule for the Biotype B of the Welsh Onion Leaf Miner, *Liriomyza chinensis* (KATO), Recorded from Ibaraki Prefecture, Japan. By Shinsuke SATO

(キーワード：ネギハモグリバエ、別系統、ネギ、薬剤検定、殺虫剤、防除体系)